

漢法苞徳塾資料	No. 168
区分	治療論・配穴
タイトル	随其經所在而取之の問題
著者	八木素萌
作成日	1989.01.02

☆五十八難に「各随其經所在而取之」とあり、十八難中段に「審而刺之者也」とあり、四難に「各以其經所在 名病逆順也」とある。六十一難に「切脈而知之者 診其寸口 視其虛実 以知其病 病在何臟腑也〜」、七十難に「春夏者 陽氣在上 人氣亦在上〜」「秋冬者 陽氣在下 人氣亦在下 故当深取之〜」、七十四難に「春刺井者 邪在肝 夏刺榮者 邪在心 季夏刺俞者 邪在脾 秋刺經者 邪在肺 冬刺合者 邪在腎〜」などがある。脈の部位の診病的な意味は、二難・三難・五難・六難・十八難の前段と中段・十九難などに記述されている。

☆十八難の前段の記述は「此皆五行子母更相生養者也」で終わっている。この文章は単に部位配当の序列が上下に相生的であると説明しているだけの意味合いであるのであろうか？七十九難の「迎而奪之者 瀉其子也 随而濟之者 補其母也〜」、七十二難の「〜随其逆順而取之故曰迎随 調氣之方 必在陰陽者 知其内外表裏 随其陰陽而調之〜」と呼応するものであると解することが、難經の記述の特質から考えて、正しいものと言えよう。また、前述の様な諸難の記述と考え合わせるならば六十九難の配穴原理・特に「〜虚者補其母 実者瀉其子 当先補之 然后瀉之〜」の記述が、主に外感病の治療配穴の原理として記述されたものと解釈して良いものと考えられる。

☆七十五難の配穴原理は前段と後段に区分して解することが重要であると考えられる。八十一難の「〜金木当更相平 当知金平木〜」は「〜金木水火土 当更相平〜」の記述に対応している。これは「〜木欲実 金当平之……………水欲実 土当平之〜」で説明されている。これに対して「東方肝也 則知肝実 西方肺也 則知肺虚 瀉南方火 補北方水 南方火 火者 木之子也 北方水 水者 木之母也 水勝火 子能令母実 母能令子虚 故瀉火補水 欲令金不得平木也 經曰 不能治其虚 何問其余 此之謂也」は意義を異にしている。傷寒論は肝実肺虚の状態を木の『横』の状態としている。この難經七十五難の後半の記述は、前半の言う所とは明らかに異なっている。「子能令母実 母能令子虚〜」という説明が裏付けている。そして「經曰 不能治其虚 何問其余 此之謂也」と続いているが、此处での「虚」が六十九難の「〜虚者補其母〜」の「虚」と同じ性質のものとは解せられない。五十六難の「積聚」の成因と対照的な病因論ともなっている。

臨床的に見ても、例えば慢性的に続いた「感冒」がようやくほぼ治ったがまだ多少の遺残を感じている状態の時に、もともと酒が強いので友人に奨められるまま飲酒して、全身に発疹を起すと言う事例は、時に見受けられるものである。これは正に『肝実肺虚』であると思うので、瀉火補水を施術すると急速に発疹が消退した経験がある。実は邪実であり、木風は陽邪である。もともと風木の邪は肺金にとっては「虚邪」であって逆証の治し憎い状態である。この場合は先補後瀉の六十九難の指示

よりも、先瀉後補の方がより有効であった。酒の強い陽性が風の陽性を増強したものと診たのである。傷寒論の「横」と、七十五難の「瀉火補水」を要する状態が同一のものであるから、この「横」と五十六難の「積聚」との相違が、治法論のどの記述に対応しているかを知ることは大きな研究課題と言う事ができよう。

☆「各随其經所在而取之」「審而刺之者也」は脈の部位論的記述と呼応しており、また、七十四難の「春刺井～夏刺榮～季夏刺俞～秋刺經～冬刺合～」、六十八難の「井主心下滿 榮主身熱 俞主体重節痛 經主喘咳寒熱 合主逆氣而泄 此五臟六腑 井榮俞經合所主病也」七十二難の「～所謂迎隨者 知榮衛之流行 經脈之往來也 隨其逆順而取之～」とも呼応している。

「經所在」は十八難前段の記述で經脈の配当が記述されているので、それは問題の所在部位の確認法が明らかにされたと解することもあり得よう。

病因としての外邪の診法は、十六難と四十九難の記述で明らかである。五臟辨別は、四難の脈状・五難の菽法・十六難の症候と脈・三十四難の声、色、臭、味、液・四十九難正經自病と五邪・等に記述されている。上下・内外・左右の病位の診法は主として十九難の記述する所である。

☆以上によって難經の取穴原理は、

- A) 病の所在する所を刺せ、
- B) 五臟の病を診て刺せ、
- C) 邪の所在を診て刺せ、
- D) 經脈の所在（五十八難では温病の場合には諸經に病が行くので一概に何の經とも言ひかねる、故に各々の所在する經を診て刺せと指示する）を診て刺せ、
- E) 虚は補い・実は瀉せ・先に補して後に瀉せ・そして、この補瀉は、脈によって決定するのではなくて、病そのものの虚実を診て決定せよ、
- F) 但し「横」の場合には先瀉後補となる。

☆補瀉には五つの種類がある。

- A) 迎隨の補瀉、
- B) 邪の性質に従うもの、
- C) 剛柔夫妻によるもの、
- D) 瀉火補水の方式によるもの、
- E) 奇經病症の砭射によるもの（二十八難）。などである。

『積聚』特に『積』は陰病であるから、特に指示はないが、七十五難の後半が該当するものの様に考えられる。つまり、「瀉火補水」の法である。この法は主として「横」の場合のものであるが、『積』が陰病であるから、「瀉」には相剋や剛柔の関係を運用する事で目的を達するという方法に拠る方が適

当であると思われるが、前半の方法ではまだ効果の点で不十分と見られるからである。この問題は『積』病の成立の構造を、『難経』が、例えば「春（木性）に熱病（火性）を患らい・火は肺（金）に邪を伝える・金（肺）は邪を木（肝）に伝えようとする・然し春は木気の旺じている時であるから肝（木）は受邪を拒否するので・邪は肺（金）に留恋する」と把握しているからで、これは正に肝の「横」の構造に他ならない。故に「瀉火補水」を軸としている七十五難後半の配穴方式が当てはまるものと考えられるのである。重要な点は七十八難の「不得氣乃与男外女内 不得氣是為十死不治也」であろう。これは不治の証と思われる場合にも、なお、投げ出すこと無く「氣」を「得」られるように試みるべき事を述べているものと考えられる。